第 7 章

家庭による教育の格差
―データからみえること―

木村　治生

近年、家庭による教育の格差が拡大しているという指摘をよく耳にする。確かに、保護者の属性や家庭の状況によって、子どもの教育に対する意識や行動は異なる。一般に、学歴が高い保護者や収入が多い保護者ほど、子どもの教育には熱心であり、積極的に子どもにかかわったり、教育費を多くかけたりする。しかし、そうした傾向は、今も昔も変わらない可能性がある。これまでの研究の多くは一時点に限られており、格差拡大の進行といった時系列での変化を確認するには限界があった。そこで、本章では経年でみたときに、本当に家庭による教育の格差が拡大しているのかという点に注目して、いくつかのデータをみていこう。なお、本調査は異なる時点で同一人物の変化をとらえるパネル調査ではないため、同じ属性をもつ群ごとに経年の変化をみる方法で比較を行うことにする。

① 学力観の変化

すでに3章1節で検討したように、母親の学力観はこの9年で大きく変化した。「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」を選択する比率が低下し、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」「今は勉強することが一番大切だ」を選択する比率は上昇している。全体的にみて、ほどほどの学力があればよいと満足するのではなく、できるだけよい成績や高い学歴を求める傾向が強まっている。それでは、どの母親もそのような思いを強めているのだろうか。

図7－1－1は、（1）生活のゆとり別（左列）と（2）母親の学歴別（右列）に学力観の経年変化を示したものである。ここでは、とくに変化が大きい項目を選んだ。なお、「生活のゆとり」についての質問は、98年調査と07年調査しかたずねていないので、9年間の経年変化である。また、「母親の学歴」については、02年調査と07年調査しかたずねていないので、5年間の経年変化を表している。

● 生活のゆとりの影響

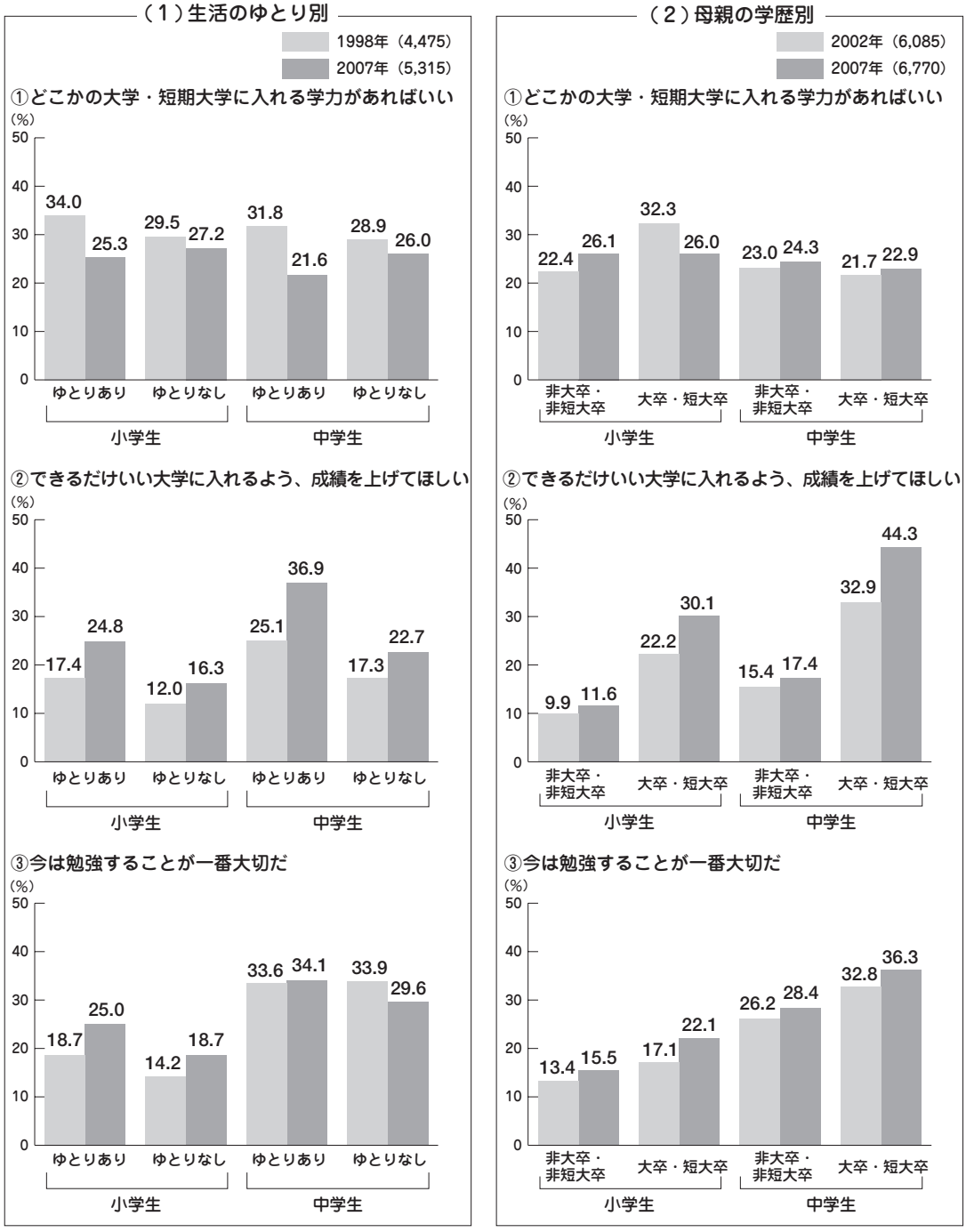
最初に、（1）「生活のゆとり」の程度によって、学力観がどのように変化したかを検討しよう。①「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」は、9年の間に選択率が低下した項目である。図をみると、子どもが小学生であるか中学生であるかを問わず、また、生活にゆとりがあるかないかを問わず、選択率が低下していることがわかる。しかし、その下がり幅は、「ゆとりあり」と回答した母親ほど大きく、「ゆとりなし」と回答した母親は小さい。

②「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」という項目では、小学生か中学生か、ゆとりがあるかないかを問わず、98年調査に比べて07年調査の数値のほうが高い。しかし、その上がり幅は、「ゆとりあり」と回答した母親ほど大きく、「ゆとりなし」と回答した母親は小さい。ここでも、経済的な状況によって変化のしかたが異なる様子が表れている。

③「今は勉強することが一番大切だ」も同様である。小学生の母親は「ゆとりあり」ほど選択率が高くなっている。中学生の母親は、「ゆとりあり」は横ばいであるものの、「ゆとりなし」は選択率が低下しており、結果として格差が拡大していることがわかる。

全般的にいって、経済的にゆとりのある家庭（母親）ほど、できるだけいい大学に行くことや勉強することを子どもに求めるようになっており、ゆとりのない家庭（母親）との差が開いている様子がみて取れる。

図７－１－１　学力観の変化（経年比較　学校段階別）



注１）生活のゆとりについて、「あなたの生活には経済的にどの程度ゆとりがありますか」の質問に、「ゆとりがある」「多少はゆとりがある」と回答した者を「ゆとりあり」、「ゆとりがない」「あまりゆとりがない」と回答した者を「ゆとりなし」とした。
注２）生活のゆとり別のデータのうち、小学生は小３～小６生の数値、中学生は中１～中３生の数値である。生活のゆとりについては、2002年調査ではたずねていない。
注３）母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した者を「大卒・短大卒」、選択しなかった者を「非大卒・非短大卒」とした。
注４）母親の学歴別のデータは、小学生は小１～小６生の数値、中学生は中１～中３生の数値である。母親の学歴については、1998年調査ではたずねていない。
注５）（　）内はサンプル数。

● 母親の学歴の影響

次に、（2）「母親の学歴」の違いごとに、学力観がどのように変化したのかを確認しよう。なお、調査では父親の学歴についてもたずねているが、傾向は同じなので省略する。

①「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」は、小学生の母親に特徴が表れている。「非大卒・非短大卒」の母親だとそのような思いを強めているが、「大卒・短大卒」の母親は選択率が低下している。

②「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」を肯定するのは、もともと学歴の高い母親に顕著であった。しかし、「非大卒・非短大卒」の母親の選択率は2ポイント程度の上昇にとどまるのに対して、「大卒・短大卒」の母親は小学生で7.9ポイント、中学生で11.4ポイント増加している。

③「今は勉強することが一番大切だ」はそれほど明確ではないが、やはり小学生の母親で「大卒・短大卒」の選択率が「非大卒・非短大卒」に比べて大きく上昇している。

この5年間で、「大卒・短大卒」の母親は、子どもにより高い学歴やよい成績を求めるようになっている。それに対して、「非大卒・非短大卒」の母親は、そうした意識があまり強まっていないことがわかる。

＊　＊　＊

全体に、経済的にゆとりがない層や「非大卒・非短大卒」の母親は、子どもに勉強をしてほしいという思いや高い学歴を求める傾向をあまり強めていない。これに対して、ゆとりがある層や「大卒・短大卒」の母親ほど、そうした意識を強めており、両者の差が拡大している様子がうかがえる。

② 期待する進学段階や中学受験

次に、子どもにどの段階までの進学を期待するかということや、中学受験を希望しているかどうかについて、経済的な要因や文化的な背景などにより差が広がっているかを検討しよう。

● 期待する進学段階

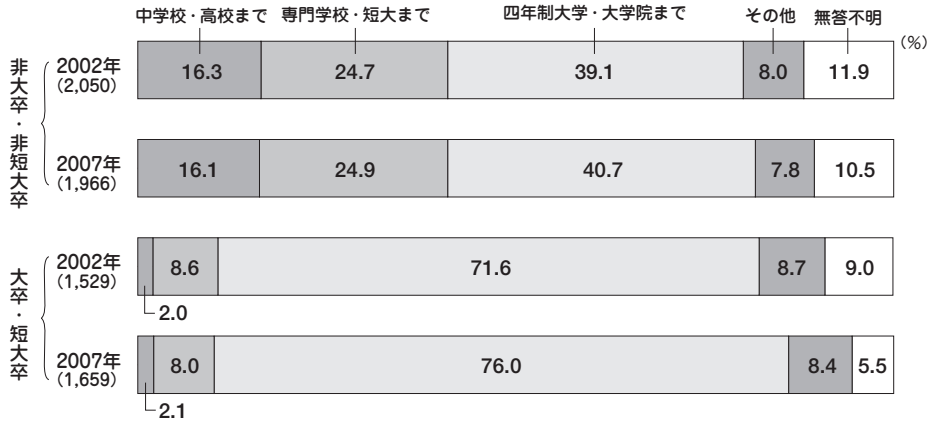
図7－2－1は、子どもにどの段階までの学校に進学させたいかをたずねた結果について、母親の学歴別に経年変化がとらえられるように示したものである。

①小学生の母親についてみてみると、もともと「非大卒・非短大卒」と「大卒・短大卒」で子どもに期待する学歴が大きく異なることが読み取れる。07年調査の数値で「四年制大学・大学院まで」を希望する比率は、「非大卒・非短大卒」40.7％に対して「大卒・短大卒」76.0％と倍近い開きがある。つづいて、5年間の推移を確認すると、「非大卒・非短大卒」はほとんど変化していないのに対して、「大卒・短大卒」の母親は「四年制大学・大学院まで」という回答が増加している。「大卒・短大卒」の母親が子どもに高い学歴を求める姿勢を強めており、前節で学力観について確認した結果と同様の傾向を示している。

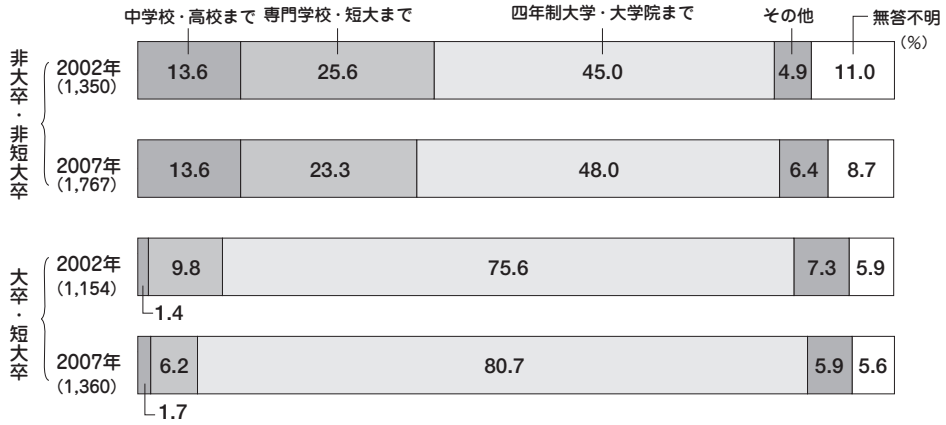
②中学生の母親については、「非大卒・非短大卒」「大卒・短大卒」ともに、「四年制大学・大学院まで」を希望する比率が増えている。また、図は省略したが、生活のゆとり別にみた9年間の比較でも、「ゆとりあり」「ゆとりなし」ともに3ポイント程度、「四年制大学・大学院まで」の比率が増えるという結果であった。「大卒・短大卒」の母親は02年調査で9割弱、「ゆとりあり」の母親は98年調査で7割弱がもともと四年制大学以上を希望しており、大きく増加する余地が小さいのかもしれない。

図７－２－１　期待する進学段階の変化（経年比較　母親の学歴別）

① 小学生



② 中学生



注１）母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した者を「大卒・短大卒」、選択しなかった者を「非大卒・非短大卒」とした。
注２）「中学校・高校まで」は「中学校まで」＋「高校まで」の%、「専門学校・短大まで」は「専門学校・各種学校まで」＋「短期大学まで」の%、「四年制大学・大学院まで」は「四年制大学まで」＋「大学院まで」の%を示す。
注３）小学生は小１～小６生の数値、中学生は中１～中３生の数値である。
注４）（　）内はサンプル数。

● 中学受験

次に、中学受験を希望しているかどうかについてみてみよう。**図７－２－２**は、（1）生活のゆとり別（上段）と（2）母親の学歴別（下段）に中学受験の希望の状況を示したものである。数値は、小５～小６生のデータを抽出した。

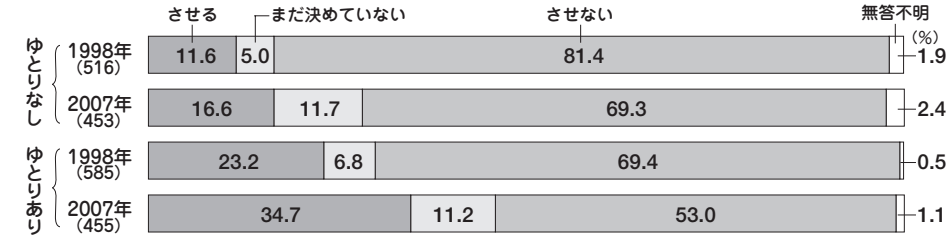
最初に、（1）生活のゆとりの程度によって中学受験の意向がどのように異なるかを確認しよう。図からは、98年調査当時でも家庭の経済状況に「ゆとりあり」と回答する母親が高い割合で中学受験をさせていることがわかる。「させる」という回答は98年調査では、「ゆとりなし」11.6％に対して、「ゆとりあり」23.2％とほぼ倍に達している。その後の07年調査では、「ゆとりなし」が16.6％と5.0ポイントの伸びにとどまるのに対して、「ゆとりあり」が34.7％と11.5ポイントも上昇した。家庭の経済的な状況によって、ゆとりがある家庭では中学受験が促進されているのに対して、ゆとりがない家庭ではその程度が弱いことがわかる。

つづいて、（2）母親の学歴別の結果である。図では、調査年を問わず、「非大卒・非短大卒」の母親よりも「大卒・短大卒」の母親のほうが高い割合で中学受験をさせていることが読み取れる。「させる」の割合は、およそ３倍も開いている。次に、５年間の変化であるが、「させる」の比率は「非大卒・非短大卒」が02年調査の10.3％から07年調査の12.0％と1.7ポイントの増加にとどまるのに対して、「大卒・短大卒」は32.5％から40.8％と8.3ポイント増えている。中学受験をさせようという意向を強めているのは、主に「大卒・短大卒」の母親であるようだ。

これまで確認したように、「大卒・短大卒」の母親は、子どもに高い学歴を期待したり、中学受験をさせたりする志向を強めており、そうでない母親との格差が開いている様子がうかがえる。こうした意識の差の拡大は、実際に教育やしつけなどの行動でも差になって表れる可能性が高いと考えられる。

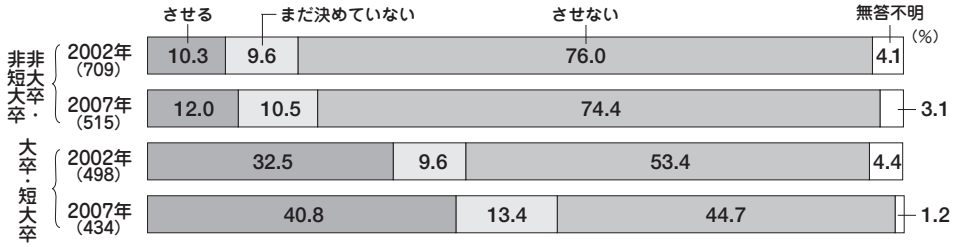
図７－２－２　中学受験の希望の変化（経年比較）

（1）生活のゆとり別



注１）生活のゆとりについて、「あなたの生活には経済的にどの程度ゆとりがありますか」の質問に、「ゆとりがある」「多少はゆとりがある」と回答した者を「ゆとりあり」、「ゆとりがない」「あまりゆとりがない」と回答した者を「ゆとりなし」とした。
注２）小５～小６生の数値。
注３）（　）内はサンプル数。

（2）母親の学歴別



注１）母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した者を「大卒・短大卒」、選択しなかった者を「非大卒・非短大卒」とした。
注２）小５～小６生の数値。
注３）（　）内はサンプル数。

③ 教育費の格差の拡大

本章の最後に、学校外の教育費に関するデータを取り上げよう。

すでに、3章5節で述べたように、今回の調査では教育費が増加していることが明らかになっている。それでは、教育投資は家庭の状況や保護者の属性を問わず積極的になったのだろうか、それとも、特定の保護者がより積極的に教育に投資するようになっているのだろうか。本節では、この点について検討したい。

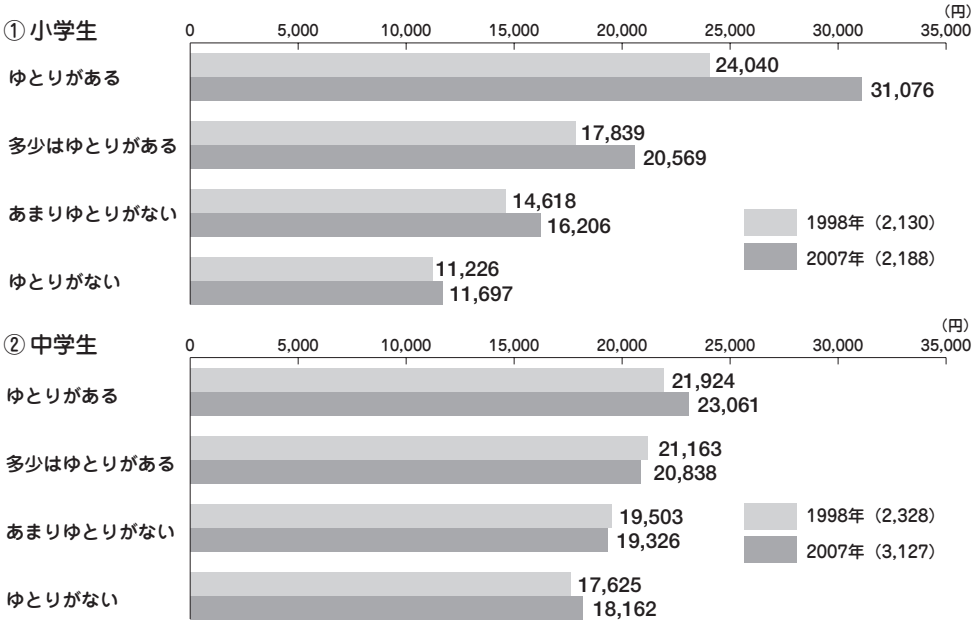
● 家庭の経済状況による格差の拡大

図7－3－1は、生活のゆとりによって学校外の教育費がどのように異なるのかを示した。生活のゆとりについては、「ゆとりがある」から「ゆとりがない」まで4段階でたずねている。この質問への回答別に、教育費の平均金額を算出し、98年調査と07年調査の金額を比較した。上が①小学生、下が②中学生の結果である。

これをみると、①小学生では「ゆとりがある」と回答した母親ほど教育費を多く支出していることがわかる。さらに、「ゆとりがある」家庭ほど、この9年で大きく教育費を伸ばしているのに対して、「ゆとりがない」場合の教育費の伸びはほんのわずかである。「ゆとりがある」と回答した母親と「ゆとりがない」と回答した母親の平均金額の差は、98年調査当時は13,000円弱であったが、07年調査には19,000円強に拡大している。

一方、②中学生の結果は、様相が異なる。子どもが中学生の場合は、生活のゆとりの状況によって教育費が大きく異なるということがない。07年調査では「ゆとりがある」と

図7－3－1　教育費の変化（経年比較　生活のゆとり別）



注1）生活のゆとりについてたずねた質問で「ゆとりがある」「多少はゆとりがある」「あまりゆとりがない」「ゆとりがない」の回答ごとに1か月にかかる子ども1人あたりの教育費の平均金額を算出した。算出方法は、「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「60,000円以上」を65,000円のように置き換えて、無答不明を除いて算出した。
注2）小学生は小3～小6生の数値、中学生は中1～中3生の数値である。
注3）（　）内はサンプル数。

「ゆとりがない」との間で5,000円程度の違いがあるが、小学生に比べると差は小さい。また、９年間の変化でも、ゆとりの状況を問わず教育費は横ばいで、格差が拡大しているといった様子はみられなかった。

これは、多くの中学生にとって高校受験が必須であり、そのため経済的なゆとりの有無を問わず受験の準備が必要になるためだと考えられる。それに対して、今回の調査対象のうち中学受験を「させる」という回答は21.8%（小３～小６生の数値）であったが、小学生では「ゆとりがある」層ほど中学受験に積極的であることは前節で確認したとおりである。このため、「ゆとりがある」家庭で中学受験のための費用が増大し、「ゆとりがない」家庭との差が大きくなっていると考えられる。さらに、経年でみたときに両者の格差が拡大している点については、中学受験を「させる」保護者の教育費が伸びており、このことが影響しているものと推察される。この点については、後述する。

● 母親の学歴による格差の拡大

それでは、母親の学歴によっても学校外にかける教育費は異なるのだろうか。**図７－３－２**は、母親の学歴別に教育費の平均金額を算出し、02年調査と07年調査が比較できる形で示した。上が①小学生、下が②中学生の結果である。この結果からは、前項でみた生活のゆとり別と同様の結果が表れている。

第一に、小学生は「非大卒・非短大卒」と「大卒・短大卒」の差が大きいのに対して、中学生は両者の差が小さい。第二に、経年でみた場合、小学生は「非大卒・非短大卒」の教育費の伸びは小さいが、「大卒・短大卒」は大きい。前者はほとんど横ばいであるのに対して、後者は1,900円程度増えている。第三に、同じく経年でみた場合、中学生は「非大卒・非短大卒」も「大卒・短大卒」も教育費は横ばいである。

このような結果は、中学受験と高校受験の違いが反映された結果だと考えられる。

● 中学受験による格差の拡大

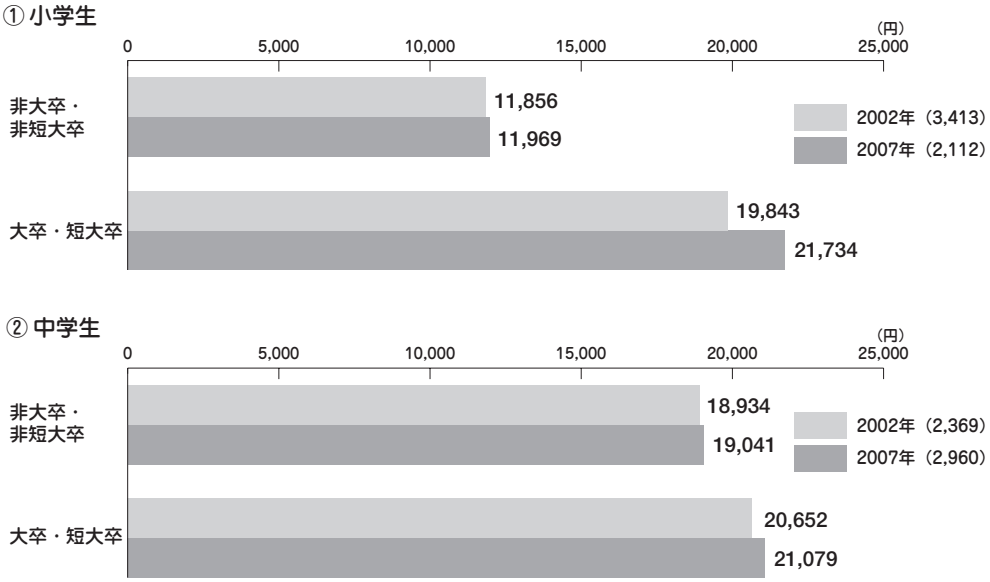
小学生では、教育費の格差拡大に中学受験が大きく影響しているようである。そこで、中学受験をさせるかどうかで教育費がどのように異なるか、その差が経年でどのように変化しているかを確認しよう。**図７－３－３**は、小５～小６生の母親について、子どもに中学受験を「させる」「まだ決めていない」「させない」と回答したそれぞれの群ごとに教育費の平均額を算出し、経年での推移をまとめた。ここからは、中学受験を「させる」家庭で、多くの学校外教育費が支出されている様子がみて取れる。いずれの調査年も中学受験を「させる」場合は、「させない」場合の４倍ほど、教育費を多くかけていることがわかる。

さらに、注目すべきなのは、「させる」と回答した場合の支出額が、年を追うごとに増加している点である。98年調査は42,500円であったが、07年調査には46,931円と4,000円以上増えている。これに対して、「させない」場合の支出額は、９年間ほぼ横ばいである。これは、中学受験をさせる場合、より多くの費用が必要になっていることを表しているといえるだろう。

＊　＊　＊

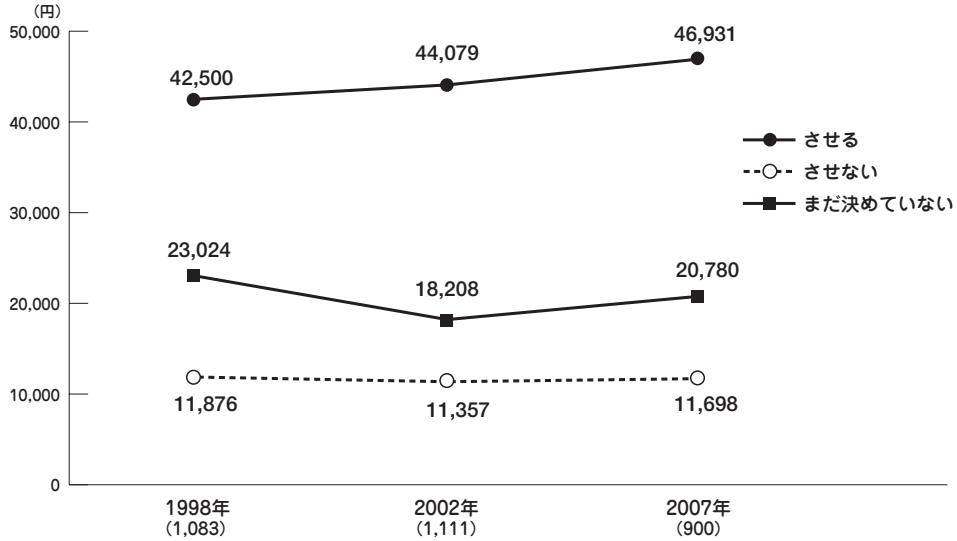
2000年前後に起きた学力低下に対する懸念や、その後の学習指導要領の改訂（完全学校週５日制、教科の学習内容の削減など）は、保護者の教育に対する不安感を高めたと考えられる。しかし、そうした教育の状況に敏感に反応した保護者と、そうでない保護者がいたことは否めない。とくに子どもが小学生の場合、経済的にゆとりがあり、学歴が高い保護者は、中学受験を志向し、多額の教育費を支出する傾向が強まっている。より多く負担できるような条件をもつ家庭でのみ、学校外の教育費の支出が増えているということである。家庭による教育の格差拡大は、確実に進行しているようだ。

図７－３－２　教育費の変化（経年比較　母親の学歴別）



注１）母親の学歴について、「あなたは大学・短期大学を卒業している」を選択した者を「大卒・短大卒」、選択しなかった者を「非大卒・非短大卒」とし、それぞれについて、１か月にかかる子ども１人あたりの教育費の平均金額を算出した。算出方法は、図７－３－１と同様。
注２）小学生は小１～小６生の数値、中学生は中１～中３生の数値である。
注３）（　）内はサンプル数。

図７－３－３　教育費の変化（経年比較　中学受験希望別）



注１）中学受験について、「お子様に中学受験をさせますか」の質問に、「させる」「まだ決めていない」「させない」の回答ごとに、１か月にかかる子ども１人あたりの教育費の平均金額を算出した。算出方法は、図７－３－１と同様。
注２）小５～小６生の数値。
注３）（　）内はサンプル数。